

今日はざっくり黙示録シリーズで、サルディス教会に注目したいのですが、話をする前に、ちょっと気が進まないのです。このYouTubeはカトリックの方も随分ご覧になっているようです。

また、ルター派の牧師さんとか、色んな聖職者の方々もご覧になっているようで、前回のメッセージの後で、全国からたくさんの本を頂きました。

ある方は「この人とは仲良くなれるかなと思ったけど、やっぱりダメなのね」というような。

つまり、カトリックの方からのお手紙だったのですが、「この人は話が分かるかなと思ったけど、やっぱりマリア様を否定するのね」みたいな事で、随分高価な本を送って来てくださったり。

私は人を傷つけるつもりはないんです。今活動している様々な団体を批判しているのではなく、かつて人類歴史の、特にヨーロッパの歴史の中でどんな事があったのかを説明しないと、今日の箇所は伝わらないんですよ。

サルディス教会はプロテスタント教会。宗教改革からウェストファリア条約(1648年)に至るまでの事ではないかな。そう考えると一番ストンときますね。

なんですが、プロテスタントとは抗議する・抵抗する。プロテストする事ですよ。

何に対して抵抗し抗議したのかというと、カトリックの体制に対してです。

だから、プロテストした人たちの事を説明するためには、彼らが抗議した対象がどのようなものだったかという事に、どうしても触れざるを得ない。

図らずも、この間教皇が来られたばかりじゃないですか。歴史上かつてあった事という事で、最終的に、プロテスタントとカトリックの問題について少し触れたいと思います。

まず復習ですが、聖書は人類歴史の初めから終わりまで全部書いてあります。

歴史の始まりについて書いてあるのが**創世記**。ここには人類のスタート・罪の初め・殺人の初め・結婚の初め・ユダヤ民族の始まり、色んな始まりが書いてある。

聖書全体の最後の**ヨハネの黙示録**に書いてあるのは人類歴史の終わり。

人類歴史の終わりをひと言で言うと“**最後の審判と、それに続く新天新地**”。

最初に、その流れをざっと復習しておきたいと思うんですね。毎回やっているんですが、今日初めての方もいらっしゃるかもしれませんので、聖書の歴史観を紹介したいと思います。

時間というのは逆戻りしません。一方向にしか進んで行かない。未来に向かってぐっと動いていますが、人類は、ある特別な時代に突入しようとしています。

この特別な時代は、人類歴史上最も不幸な時代・苦しい時代で、7年間続き、**患難時代**とも呼ばれます。恐らくこの7年間に、人類の人口が3/4以下になると思われます。

患難時代は、反キリストと言われる人物がイスラエルと7年有効期限契約を結ぶ事で始まり、イエス・キリストが地上に再臨する事で終わります。そして**患難時代**の後に、地上再臨したキリストが地上で王として君臨して世界を治め、その期間は1000年間続くので**千年王国**と言われます。

ところが、千年王国の最後に、四方から諸国の民、言わば異民族が入って来て、キリストに対して反逆します。が、天からの裁きで彼らは滅び、その後に最後の審判があります。

最後の審判の後に、新しい天と新しい地が始まるのです。

では、患難時代の前に何があるのか？ キリストが十字架にかかって墓に葬られ、3日目によみがえり、40日後に天に帰って行かれましたが、残された弟子たちに聖霊という神の霊が下りました。

この瞬間が教会の誕生・教会時代の始まりです。

教会時代は7つの段階を経て、最終的な局面に入っていきます。

(*7段階の)7番目はどこで終わるかということ、キリストの携挙で終わります。

キリストは空中まで来て、本物の救われているクリスチャンだけを引き上げてくださる。

それからしばらくして患難時代が始まるのです。

今まで(*7段階の)4番まで終わって、今日は5番目のサルディス教会です。

黙示録3:1 またサルディスにある教会の御使いに書き送れ。

「神の七つの御霊と七つの星を持つ方が、こう言われる一。」

サルディス教会はプロテスタント教会の誕生、すなわち宗教改革からウエストファリア条約まで…。

宗教改革はルターの宗教改革で1517年、からウエストファリア条約は1648年。

この間の事を歴史的に当てはめると、非常によく当てはまるのです。

ルターの宗教改革は是非覚えてください。この新改訳聖書は2017版と言います。

なぜ第4版と言わずに2017版と言うのか？ ルターの宗教改革からちょうど500年目に完成したので、それを記念して2017版と言うのです。

世界史を考える時に、ものすごく大きな分水嶺となっているのが1517年で、これの覚え方を紹介します。前にも1度やったのですが、ルターの「ル」の左側は1に見えますよね？ 見えますよ。どう考えても。「ル」の右側はV。Vはギリシア数字で5。これで15。「タ」は思い込みで見ると17に見えてきませんか？ つまり、ルターは名前の中に1517年が秘められているのです！

お一人だけメモされて、ありがとうございます。バカバカしいと思いながら、このバカバカしいのが却って覚えるんですよ。

中世のカトリックとプロテスタントの関係をざっと、今からヨーロッパ史を考えていきます。

ヨハネの黙示録が書かれたのがAD96年くらい。ヨハネはキリストの12弟子の最後の生き残りです。

彼はパトモスという島に流されていました。なぜひどい目に遭っているかということ、真(まこと)の神であるイエス・キリスト以外は絶対に拝まないから。

黙示録が書かれた当時のローマ皇帝はドミティアヌスで、自らを神と名乗りました。

クリスチャンは絶対に偶像礼拝をしません。今「クリスチャンでも偶像礼拝、別にいいよ」と言っている人がいるかもしれないけど、それはまともなクリスチャンではない。

まともなクリスチャンなら、それは出来ない。

ローマ帝国で、ユダヤ人やクリスチャンは絶対に神以外を拝まないという事で、特にクリスチャンは目の敵にされて迫害を受けました。ところが、迫害されても迫害されても、却って数が増えて行った。

迫害時代の教会がどんなクリスチャンで構成されているかという、「迫害を受けても信仰を捨てない」という覚悟を持っているクリスチャンばかりで集まっている教会。

「迫害と引き換えに、自分の将来を棒に振ってもいい」という信仰の人たち。

だから、迫害時代の教会は本物のクリスチャンによって構成されていると言う事ができます。

それがちょうど96年。黙示録が書かれた頃ですね。

313年、ローマ皇帝自らがクリスチャンになります。その結果、彼はキリスト教を公認しました。

この段階で迫害は終わります。他の宗教を信じてても構いません。公認されるわけです。

392年、キリスト教は国教化されました。国教化というのは、ローマ市民は全員クリスチャンにならなければならないんです。ローマ市民でオギャーと産まれたら、幼児洗礼で自動的にクリスチャンになる。

個人の信仰は問われない。ローマ人なら皆キリスト教徒にならなければならない。

となると、教会の中に、信じていない、名目上のクリスチャンがドンドン増えて来るんですよ。

迫害があっても信じる事を選ぶ場合は、意識的に選択したクリスチャンだから本物のクリスチャン。

だけど、ふっと気がついたら「俺、赤ちゃんの時、何か洗礼受けてみたい」という人が大人になって行った時、信仰は何もありません。名目的にはクリスチャンだけど、イエス・キリストに対する信仰を全く持っていない人たちが殆どだ、という教会に変質してしまうんです。

その3年後の395年、ローマ帝国が東西に分割され、東半分が東ローマ帝国。西半分が西ローマ帝国。

西ローマ帝国の中心はローマ。東ローマ帝国の中心はコンスタンチノーブル。

コンスタンチノーブルは元々ビザンチノスという名前だったので、西ローマ帝国の人たちは、東ローマ帝国をビザンツ帝国と呼んだんです。

東ローマ帝国の人たちはビザンツ帝国とは言いません。自分たちがローマだと思っているから。

でも、西ローマ帝国の人たちは内心「あいつら、ローマをかたる資格ないわ」と思っているのです、東の事を「ローマ」が付かないビザンツ帝国とかビザンチンと言いました。

東ローマ帝国は、もうギリシア地方になるんですね。

西ローマ帝国の中心はローマですが、経済的にどんどん落ちて行きます。

ローマ帝国が大きくなる前は、ローマは文明の最先端でした。どんどん拡大して属州を抱え込むと、その属州に対して、初めは最先端の物を作って売ってました。ぶどう酒やオリーブオイルを作って輸出したり、ローマの工芸品や工業製品を輸出していたけど、長い時間をかけて行くと、周辺属州にも文明が開かれて同じ事を始めます。

フランスはガリア地方と呼ばれていましたが、そこでもぶどうやオリーブオイルを作るようになったら、ガリア人はローマの特産品を買わなくなりました。

80年代は、日本の「メイドインジャパン」と言えば世界に冠たるものでしたね。だけど、スマホも液晶も太陽光パネルもICも、大抵中国・韓国・東南アジアにブワッと工場移転して、ふっと気がつけば日本は生産財だけじゃないですか。

それと同じような事がローマでも起こって、ローマは段々経済的に落ちて行きました。

東ローマ帝国は穀物交易があったので繁栄します。西は財力がなくなって、軍事費にお金をかける事が出来なくなり、その結果、西ローマ帝国にゲルマン民族がどんどん入って来ました。

ゲルマン民族は西ローマ帝国の中に、勝手にたくさんの国を造ったんですが、その中に、特に戦争にめっぽう強いフランク族という部族がいます。フランク族が造った国がフランク王国。
今のフランス・ドイツ・イタリアを足したくらい。大きな国を勝手に造るので、西ローマ帝国は空中分解してパーンとなくなった。異民族によって虫食い状態にされ、西ローマ帝国は空中分解・自然消滅みたいになくなってしまいました。

ゲルマン人は西ローマ帝国内のあちこちに国を造りますが、ローマ帝国はなくなってもローマ人がいなくなったわけではない。ゲルマン人は戦争が強いから「俺たちの国だ!」と国を造るけど、人口比率でははるかに少数派。後から入って来たゲルマン人が、元々いたローマ人に新しい王様として受け入れてもらうにはどうしたらいいか? 反感買うような事をしたら駄目です。
彼らが考えたのは「ローマ皇帝は引退していなくなったけど、ローマ教会があるじゃない。」

国教なので、ローマ人は皆「我々はローマカトリック キリスト教徒だ」という連帯意識がありました。そこで、一番大きなフランク王国の初代王様カール、おやつみたいな名前のカール大帝が、ローマカトリックのトップである教皇の前にひざまずいたんです。

ローマ人が皆尊敬している教皇から「お前を王様に任命する」と言ってもらう事によって、ローマ人が「教皇様がそう仰っているんだから我々も認めよう」となる。
自らの権力の正統性を確保するために、ローマ人が尊敬しているローマ教会トップの教皇によって任命されると。任命された時に与えられたフランク王国の名前が神聖ローマ帝国。
意味は、神聖なローマカトリック教会の教皇によって任命された王様が治める国。

このようにして権威を持つ事が出来たので、他のゲルマン人の国々も全部右へ倣えて同じ事をしました。これが、カトリック教会が強大化して行く非常に大きな理由になったのです。
中世のカトリック教会が非常に強くなった3つの理由があります。

カトリック教会強大化の理由①; 今申し上げたように、国家の上に教会が君臨する図式が成立した事。その国が正統的かどうかを誰が決めるのか? 教会が決める。カトリック教会の教皇が「これ、良し」と言えば、その国は良し。「駄目」と言ったらどうなるか? 実は「駄目」と言われた国があります。

ローマ教皇から国として認められた場合、王は一生頭が上がりません。もし逆らったら破門されるから。破門されると、その王様は奥様と離婚しなければなりません。親とも断絶、兄弟とも絶縁、家臣は皆カトリック教徒なので、この王様を捨てる。臣下がいなくなる。1人ぼっちの裸の王様になってしまう。破門という切り札があるので、国よりも教会のトップの方が実質的な力を持っている。国の上に教会が立っている。これが中世の特徴です。

カトリック教会強大化の理由②; 間違った終末論の解釈によって、ヨーロッパ全体が大パニックに陥るのが数百年続いたから。

聖書の歴史観は「歴史には始まり（**天地創造**）と終わり（**最後の審判**）がある。」

ヨハネの黙示録に書いてありますね。

「最後の審判が起こる前に、この世界がキリストによって千年間治められる時代がある。その時代は非常に平和で豊かで素晴らしい。悪魔が閉じ込められているから。だから、千年間は非常に良くて、エデンの園が全世界にまで及んだような環境だけど、最後に異民族が入って来て反逆があり、最後の裁きが行われる。」

私たちは聖書を書いてある通りに読んでいます。

しかし、カトリックの神学者たちは千年王国をこう解釈しました。

「千年王国は比喻である。キリストがもう1度地上に下りて来て、この世界を治めるというのは比喻/もののたとえ。そういうのを全部まともに信じるのは聖書の解釈じゃない。千年とは、キリストがこの世界に姿を現してから千年間の事だ。」キリスト降誕から数えて千年という事はAD1000年。

「AD1000年が終わると、間もなく最後の審判が来る」と教えたんです。

最後の審判の前に起こる最大のしるしは異民族が流入するという事でした。

中世時代は実際900年代に入って、北方のスウェーデンやスカンジナビアの方から、ノルマン人といわれる人たちがヨーロッパにどんどんやって来て上陸します。バイキング。

東方ロシア方面からはマジャール人とかフン族。フン族が造った国がハンガリー。ハンガリーのハンはフンから来ています。

キリストが来て1000年経ったら最後の審判に近づいて、その最大のしるしは異民族流入。

実際ヨーロッパ世界に色んな異民族が流入しているじゃないか。ヨーロッパ人は恐怖のどん底に叩き落とされました。もう間もなく最後の審判が始まる。我々は黙示録の時代の只中を生きている。

最後の審判で神から「よし。あなたは合格。あなたの罪は見当たらない。あなたは天国に行く」と言ってもらうためにはどうしたらいいのか？本物のクリスチャンでなければ、そのように言ってもらえない。

本物のクリスチャンと誰が決めるのか？最後の審判で合格か不合格かを定める事が出来る機関は1つだけ。それはカトリック教会である。そして出した条件が、幼児洗礼を受ける事・箱の中に入って懺悔する事・献金をたくさんする事・持っている財産と土地を寄進する事。

カトリック教会が強大化した理由の1つ目は、国よりも上に立ったからです。

そして2つ目のこの理由のゆえに、ヨーロッパ最大のお金持ち組織になりました。ヨーロッパ中の富が、カトリック教会の金庫の中にウワツと流れて行ったんです。

何回も言いますが、今のカトリック教会の事じゃないですよ。誤解しないでください。

この当時はそうだったんです。

そして掟というか、1つに聖地巡礼がありました。当時カトリックの聖地は3つあったそうです。

1番目はエルサレムのイエス・キリストのお墓がある聖墳墓教会（せいふんぼ きょうかい）。

そこに、一生に一度は巡礼に行く事。私も今年2月に聖墳墓教会に行きました。

巡礼に行ったんじゃないですよ。ただ行ったんです。もう、人を見に行ったようなものでした。

前に進まない。ただ押されながらずっと行く。すごい人でした。

とにかく一生に一度、イエスのお墓がある聖墳墓教会に墓参りに行く。復活したのにお墓に行く。

2番目は12弟子の中心的人物だったかもしれないペテロ。彼は最終的にはローマで殉教しますね。

ローマのスタジアムで処刑され、ローマに葬られました。そのお墓の上にサンピエトロ寺院という教会堂が建っています。そのローマに巡礼に行く事。

3番目はヤコブのお墓があるスペインに行く事。他にも色々あるかもしれないけど、そのような巡礼。だけど、それを実行するのは並大抵の事ではない。

そこで、巡礼に行けなくても、地上で犯した罪が全部消えて、天国に直接行く事が出来る物として“免罪符（めんざいふ）”を売り出したんです。

お守りみたいな形をしているそうですが、当時のローマ教皇のサインがあつて、べらぼうに高額なお金で売りつけました。なので、金庫にはたくさんのお金・莫大な富がどんどん入って行く。それで、政治権力だけじゃなく、経済的にも空前の大金持ちになり、財産を持ったがためにそれを守ろうと武装します。

日本でも比叡山の僧兵、いたじゃないですか。坊さんがなぜ武装するのか？ 不動産を持っているから。比叡山は1つの国みたいだった。信長に対抗できるような国力・軍事力を持っているわけです。

なので、色んな〇〇騎士団とかを持ちながら、武装するようになって行きます。なぜこのようになって行くのか？ 要するに、最後の審判という恐怖心が、教会に対して妄信的・盲従的態度を取らせる原因になったのです。聖書の誤った解釈がヨーロッパの人たちを迷わせた。惑わせた。間違った聖書知識や聖書解釈が、人類歴史をある一定期間、大きく変えていた。

つくづく思うのは、バイブルは字義的に読まないダメです。「ここは比喻だ」と書いてあるところは比喻として読んだらいい。「～～のようであった」の「ようであった」というのは比喻ですね。だけど、そうでない場合は額面通り受け止めるべきです。144000人と書いてあったら144,000人です。ユダヤ人と書いてあったらユダヤ人の事です。教会と書いてあったら教会の事です。イスラエルと書いてあったらイスラエルの事です。他の事を考えちゃダメなんですよ。

そうでないと、会話は成り立たないんじゃないですか？ 今「会話は成り立たない」と言ったけど、その「会話」というのは、高原さんには深い意味があつて、実は「会話」という意味ではなく「惑星」の事である、とか解釈して行ったら話が届きません！ 字義通りに解釈するのがいい。

カトリック教会強大化の理由③；東ローマ帝国の没落。西ローマ帝国と東ローマ帝国が分割してから、教会間の交わりもなくなりました。西ローマ帝国の国教はローマカトリック。東ローマ帝国の国教はギリシア正教になったから。東ローマ帝国の中心部は、もうギリシアなんです。

ローマ帝国の公用語はラテン語でしたが、分割して行き来がなくなると、ラテン語を話せる人が少なくなり、遂にいなくなって、東ローマ帝国の公用語はギリシア語になりました。ギリシア語が分からない西ローマ帝国の人と、ラテン語が分からない東ローマ帝国の人が、どうやって交わりますか？

更に、カトリック教会では、国々の上に立つ最高権威はローマ教皇。国の上に教会。東ローマ帝国では、教会のドグマ(教理)で神の代理人は東ローマ帝国皇帝。教会の上に政治家・皇帝。だから、どんなにカトリック教皇が活躍しても、東ローマのギリシア正教では、その権威は認めない。

正教は英語でオーソドックス/正統派という意味です。キリスト教の正統派はこっちだと。カトリックは普遍的という意味があります。世界どこでも通用する普遍的な教えなんだと。両方共「お前がおかしい」と言って、最終的に相互破門するんですね。お互いが「除名だ!」と言って終わる。ものすごい溝があるわけです。

そんな状況の中 900年代 10世紀、トルコ人が東ローマ帝国に入り出しました。セルジューク・トルコ。聞いた事がありますか？ トルコ人は戦争のやり方が非常に上手くて、東ローマは次から次へと破れ果て、

もう陥落の一步手前。このままでは東ローマ帝国滅亡というところに至った時、ローマ教皇に援軍を頼みます。「このままでは滅ぼされるから、助けの手を差し延ばしてくれ。援軍を送ってくれ。」

その時、ローマ教皇は「敵が困っている。もし彼を助けたらどうなるか？ 助ける事と引き換えに、東ローマにもローマ教皇は最高の権威である、と認めさせる事が出来るのではないか」という魂胆で、ローマ世界の再統一というか、ローマ教会のトップがローマ世界全体のトップになるために、援軍要請に応えようと決めました。ウルバヌス 2 世（1042-1099/在位 1088-1099）という人です。

しかし、実際に援軍となると、教会から行くわけにはいかないのです、教会が王として任命している諸国の王たち、フランスの王たちに「おい、軍隊出してくれや」と言おうとします。

だけど、今まで敵対視していた国のために、1つしかない命を危険に晒す戦争って燃えますか？

自国防衛のためなら「よし!」となるかもしれないけど、はっきり言って「仲の悪い国のために、なぜ大切な命を危険に晒さないといけないのか」という事になる。燃えないですよ、そういう要請の仕方は。

そこで、別の言い方をしました。「今、聖地エルサレムは異教徒（イスラム教徒とユダヤ教徒）によって汚（けが）されている。聖地エルサレムは我々の手にあるのではなく、イスラム教徒によって支配されている。もうすぐ最後の審判が来るが、確実に天国に行ける方法は、諸君が立ち上がって、エルサレム奪回作戦に身を投じる事である。」これを十字軍と言います。全部で7回行っています。

「諸君が立ち上がって、この戦争に身を献げるなら、諸君は天国に直行するぞ!」

1096 年、狂信的になった騎士団たちがエルサレムに行ったのですが、その時、非常に残酷な事が行われました。頭に血が上っているのです、ユダヤ人もイスラム教徒も虐殺し、エルサレムにいたギリシア正教徒も虐殺したんです。

このプロの兵士たちの後に、「俺たちも魂の救済が欲しい」と一般庶民がゾロゾロと付いて行ったけど、所詮烏合の衆。イスラムの軍隊と激突し、1回目はエルサレムを奪還しますが、すぐにエジプト軍に再占領され、十字軍は大敗北し、生き残った人たちは奴隷として売り飛ばされて行きました。

それでも彼らが言う事を聞いて来たのは、東ローマ帝国の没落で、相対的に西ローマ帝国がより強くなるから。そして、西ローマ帝国の教皇が最後の審判という脅迫切り札を使うから。

この3つの事が原因で、中世時代にカトリックが非常に強くなったのです。

しかし、どうもおかしいという風が変わって行きます。1回目の十字軍は1096年。

ところが1100年・1200年になっても最後の審判は中々始まらない。1300年になってもまだ。

「ちょっとおかしいんちゃう？ 1000年になったら、すぐにでも最後の審判あると思ったら、300年経てるのに来ない。」

王たちは、なけなしのお金で莫大な軍事費を工面して、遠征部隊を送って、大抵敗北して帰って来る。

「こんなに付き合ってもらえるか!」と、遂にローマ教皇に反旗を翻す王様が出て来ました。

最初に反旗を翻したのがフランスのフィリップ 4 世（1268-1314/在位 1285-1314）。彼はよく考えてみた。

「もし言う事を聞かなかったら、最悪の事は何か?」

これ、皆さんもなさってみたらどうですか？ 最悪の事を1度考えてみる。

「これを断って最悪の事は破門や。破門が怖いのは、破門されたら、妻は離縁・親子は断絶・兄弟離散・

臣下も皆私を捨てるから。反旗を翻しても皆が私から離れない、という確約を取れば、破門はそんなに怖くないやん。」

そうして、フランス歴史上初めての議会“三部会”が開かれました。

聖職者代表・貴族代表・市民代表の3部で構成された人たちが一堂に会します。

彼は「このままでは皆に辛い思いをさせるし、こんな無駄な戦争はやめるべきだと思う。それで、ローマ教皇に反対しようと思うが破門されるだろう。その時、皆私について来てくれるか?」「ついて行きます。」
よっしゃ! これで確約取れたので、フィリップ4世はフランス軍最精鋭部隊を、何とバチカンに投入するんです。軍隊が教会に流れ込んだ。

逃げ惑う教皇たちをアナーニという町で逮捕したのですが、その時、血がカーッととなっていたある兵士が高齢の教皇を殴った。それで、ショックで教皇は亡くなりました。

山川(*出版社)の世界史Bには「憤死した」と書いてありました。憤りのあまり死んだと。これをアナーニ事件と言います。

ここから坂道を転げ落ちるように、カトリック教会が衰退して行きます。

アナーニ事件を分水嶺にして中世が終わるんです。同じように逆らう国々がヨーロッパ中に出ました。ローマ教皇の権威が落ちて行く。そのとどめを刺したのがルターとカルバンです。

ルターは1517年、覚えているでしょ。宗教改革。お金を払って天国に行くという免罪符。

「天国は金で買えるという事か? つまり、神は金銭で買収出来る存在なのか? 神は金なんか受け取らない。金を受け取っているのはカトリックの聖職者たちだ。金で罪が消されるというならば、聖書のどこにそれが書いてあるかを示してほしい。教皇と言えども、聖書が主張している事と矛盾する発言は全部間違いである。」

「人間が創造主である神を正しく知る上で、聖書に勝る権威はない。聖書のみである。私はここに立つ。人が罪赦されるのはお金ではなく、ただ神がしてくださった事に対する信仰だけである。信仰のみである。良い行いによって罪が消える、そんな事はない。」

以前ここでもお話したので重複するのですが、汚れたものをもう1度キレイにするって難しいですよ。僕は毎日汚しているから。この間も僕の大事なiPadに牛乳がかかりまして、ほんとに。買いました。何かしらんけど、最近よく物を落とすんです。そんな事ないですか? どうでもいい事ですけど。

京都に尊敬する友人、書の大家がいます。とても上手な書の言葉、私はこの方が下さる年賀状をお手本に字を練習した事があって、「こんな字書きたい!」と書くのですが、もっと下手になる。

基礎がないのに、くずしの字から入るとロクな事がないというのが分かって、もうやめました。色んな字がありますが、好みがありますよね。私はこの方の字が大好きなんです。

この方が昔、西陣織の白い反物の上に着物の図柄を描くというお仕事をしていました。蝶や滝や桜の絵を見事に描いていかれる。根詰めて集中しないと出来ない仕事です。ある時ちょっと一息、オレンジジュース飲んで、飲み干せばいいのに半分残して、コップを隣に置いて仕事を再開しました。

その時、肘がコップにコンと当たって、コップがパタンと倒れ、ジュースがツーッと流れて、真っ白の絹の反物にスーッと吸い込まれて行った。皆様は他人事なので何にも感じてないようですが、絹の反物。「しまった!」と2度洗いじゃなく3度洗い。そして、シワが残らないようにきれいにアイロン掛けて。

オレンジの果汁がどこにも見当たらない新品同様みたいにし、それから筆で描いて、担当の人に渡しました。すぐに電話がかかって来たそうです。「何したん？」

そこから染色工場に持って行って色付けするのですが、染色液とオレンジ果汁が化学反応を起こし、ケロイドのようにブワッと広がっている。人間の目にはきれいに拭えたと思えるけど、そんな生易しいものじゃない。良くしようとして、もっとひどくなったという話です。

「こんなひどい事、取り返しのつかない事やってしまった！ だから私は誠心誠意、心を込めて洗う！」
洗い流せません！ 1度汚れたものは。免罪符の金で、人がかつて犯した罪を消すなんて事は出来ません。ルターは「出来ないんだ。これを消すには、キリストの血潮以外にないのだ」と語ったのです。

「自分のメッセージは真実だ」と知ってもらうために、ルターが多くの時間をかけて取り組んだのは、ドイツ語訳聖書を翻訳するという事でした。聖書の原典は、旧約はヘブライ語・新約はギリシア語。それを、古代ローマ帝国の言葉だったラテン語に翻訳された物が教会で使われていましたが、ラテン語なんて、専門教育の訓練を受けている人以外誰も読めません。

聖書はあったけど、訳の分からん言葉で書かれているので、一般庶民は誰も聖書を読んだ事がなかった。だから、どんなに聖書に書いていない事を説明されても、聖書を用いて反論できない。聖書そのものを読む事ができないから。聖書を知りたいと思ったら、教会に行って「そこを翻訳して教えてください」と言うしかなかったんです。

日本で生まれ育ったドイツ人の友人がいるので、「ルターのドイツ語聖書はどんなドイツ語ですか？」
「肉屋のおやじが喋るようなドイツ語。」ますます分からん。要するに“ざあます言葉”じゃない。
「ごきげんよう」とかじゃなくて骨太。骨格がゴツゴツと、はっきりしている迫力満点のドイツ語。
これで、ドイツ人が母国語で神の言葉を読む事ができるようになったのです。
しかも時を同じくして、ゲーテンベルグの活版印刷術ができ、聖書の大量印刷も可能になるわけです。

『免罪符・巡礼・懺悔とかで罪が赦される』と言うけど、そんな事は聖書のどこにも書いてない！』という事を明らかにして、『5つの“のみ”』とよく言われる「聖書のみ・信仰のみ・恵みのみ・キリストのみ・神の栄光のみ」を主張してプロテスタント教会が誕生しました。これ、いい話。ここまでは。続きがありますねん。

黙示録 3:1 また、サルディスにある教会の御使いに書き送れ。

「神の七つの御霊と七つの星を持つ方が、こう言われる―。わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。」

御霊は神の霊/聖霊の事。七つの御霊は聖霊が7つあるのではなく、完全な働きをなさる聖霊。聖霊という神の霊が人にいのちを与えます。人にいのちを与える霊を持つ方が語るというのは、いのちのない教会になっているプロテスタント教会への警告なんです。

わたしはあなたの行いを知っている。キリストは教会の内情を熟知しておられ、どんな問題があるのか、何が原因か、全部お見通しである。

あなたは、生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。サルディス教会はある名前を持っています。「生きている」という名前。でも、その名前は名ばかりで、実体は死んでいる。

生きているとはどういう事か？ 例えば、生きている魚は流れに逆らって泳いで行く事も出来るし、留まる事も出来る。死んだ魚は流れに乗かってぷかぷか浮いて、川下に向かって流れて行くしかない。生きているという事は抵抗できる。プロテストできる。プロテストするという名前を持っている。

しかし、実は死んでいる。死んでいるとは救われていないという意味。永遠のいのちを持っていない。プロテスタント教会といっても、皆が信じているのではなく、大部分は死んでいる!という告発。生きているとは名ばかりで、実は死んでいるとは、教理は正しいが行動が全く伴っていない、信仰がない状態の事。

プロテスタント教会は、主にヨーロッパの北の方で広がって行きました。南の方はカトリックが多い。どのようにしてプロテスタント、或いはカトリックになるのでしょうか？

例えば、当時ドイツには約 300 の国がありました。

日本の江戸時代、約 300 の藩があって、薩摩藩・長州藩・南部藩とかそれぞれ藩主がいて独立国ですね。同じようにドイツにも 300 くらいの国々があったのですが、ある国はプロテスタントの国になり、ある国はカトリックの国になります。それがどうやって決まるのか？

カトリックの教理を信じる人が多いか、プロテスタントの教理を信じる人が多いかではない。

その国の領主がプロテスタントで行くと言ったら、領民は全員、個人の選択とは無関係にプロテスタントの位置になるんです。

ある国の領主が、ハプスブルグ家みたいに「カトリックの方が共存共栄できるからカトリックにつく」と言えば全員カトリック。つまり、個人の信仰が問われるのではなかった。

当時のカトリックの背後には、もちろんハプスブルグ家をはじめ、実際的な政治力があつたので、ルターがプロテスタントの活動をするという事は命を落とすという事です。

それで、その政治力に抗ってプロテスタントを広めて行くためには、プロテスタントも、バックアップしてくれる政治力と結びつく必要があると考えました。

ルターの場合はザクセン国のザクセン公という王様に守られるのですが、ただ守ってもらっただけではなく、ルターの教会のトップはザクセン公。つまり、プロテスタントも国家と癒着した。

かつてローマ皇帝がキリスト教を国教化し、国家権力と教会が癒着する事によってカトリックが墮落して行ったように、同じように、プロテスタントも国家のトップが教会のトップになったんです。

今でもそうなんですよ。ドイツやスカンジナビアの方ではルター派教会が国教です。国の宗教。

イングランドでは聖公会。聖公会の最高責任者はカンタベリー卿ではなく女王陛下。政治家です。

スコットランドは長老教会。そのトップはスコットランドの王様。

スイスは改革派。そのトップはスイスとその地方の王様。

つまり、ローマがキリスト教を国教にしたのと同じ事を、プロテスタントの時代に入ってもやった。

皆さん、働いたら税金取られますね。僕はカリフォルニア州とオレゴン州・ワシントン州に行きましたが、オレゴン州に買い物に行く人がとても多いそうです。オレゴン州だけ消費税ゼロ。

なので、州をまたいで車やクルーズ船や高額な物を買ってくる。

ハワイに住んでいる人も、オレゴン州で高級車を買って、船で運んだ方がはるかに安いと。

税金。消費税。IMF が日本も 15%にしろと。何言うとなねんと。「お前、なにもんや!」と言いたくなるね。

8%から10%になって、皆さんいかがですか？僕もカードでPayPayするようになりましたよ。
2%のポイント還元のために。「何でこんなチマチマしなあかんねん！」ブリブリ怒りながらやるわけです。

でも、今述べた国々では、教会税という税金が、給料貰う時に差っ引かれています。
教会に行って自発的に献金するのではなく、源泉徴収の段階で、年金とか社会保障費とか色んなのと一緒に、教会税の項目があって引かれている。税金で牧師の給料が払われているんです。
国教会。国の教会だから。あなたは国民だから払う義務がある。

そして、そういう国では幼児洗礼。赤ちゃんだから聖書を読んだ事もないし、自分で選択する事も何も出来ない。生まれて間もない赤ちゃんに幼児洗礼を授けて「はい、これで教会メンバー。」形だけ。
だから、その人が大人になると、“信仰を持っていない、洗礼を受けた国教会のメンバー”になるわけ。
つまり、国教会のメンバーの殆どは、クリスチャンではない名目クリスチャン。
だから、無神論のクリスチャンとか、汎神論のクリスチャンとか、共産主義のクリスチャンとか、不思議なカテゴリーが出て来る。

教理においては、様々な間違った教理を正したという意味では生きています。
もっと言えば、ルターもカルバンも元々カトリックの人ですよ。生まれた時からプロテスタント違う。
修道士でした。すなわち、カトリック教会の中で敬虔に・真実に・聖書の救いを、福音を理解したいと願っている方々がたくさんいた。そのお陰で、私たちは正しい聖書理解を受け取る事が出来るようになっていたのです。
名前は生きています。教理は聖書的。だけど、個人的に信仰を受け入れてはいないので、結局死んでいる。

黙示録 3:2 目を覚まし、死にかけている残りの者たちをカづけなさい。
わたしは、あなたの行いがわたしの神の御前に完了したとは見ていない。
プロテストするだけでは、働きは終わっていない。死にかけている残りの者たちをカづけなさい。

黙示録 3:3 だから、どのように受け、聞いたのか思い起こし、それを守り、悔い改めなさい。
目を覚まさないなら、わたしは盗人のように来る。
わたしがいつあなたのところに来るか、あなたには決して分からない。

あの信仰の改革者たちが、この真理に至るまでにどのように葛藤し、戦い、危険な目に遭い、それをあなた方はどのように聞いたのかを思い起こして、そして悔い改めなさい。
教理を持っているだけではなく、それを信じなさい。それを守り、悔い改めなさい。

そうしないなら、目を覚まさないなら、わたし（キリスト）は盗人のように来る。
キリストはクリスチャンを迎えるために再び来ますが、盗人のように来る。
夜中に盗人・見も知らぬ人が立ってたら、「うえっ！」ビックリするじゃないですか。
「うちには何もないぞ！相手選んで入れ！」みたいな。ビックリする。

携拳の時にビックリする人たちとは、置いて行かれる人たちです。
キリストがまた空中まで来られて、クリスチャンを一気に引き上げる時に驚くのは地上に残された人たち。
レフトビハインドですよ。

わたしがいつあなたのところに来るか、あなたには決して分からない。

悔い改めない人・聖書の真理を受け入れない人・プロテスタントだから大丈夫だと思っている人、あなた方にはいのちはない。あなたには決して分からない。

黙示録 3:4 しかし、サルディスには、**わずかだが、その衣を汚（けが）さなかつた者たちがいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らがそれにふさわしい者たちだからである。**

黙示録 3:5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。

勝利を得るの意味は、特別なすごい事をするという事ではなく、キリストを救い主として信じ、受け入れるという事です。その者には白い衣を着せられる。

黙示録 7 章に、ヨハネが天国の様子を見せられて記録している箇所があります。

黙示録 7:9 **その後（のち）、私（ヨハネ）は見た。すると見よ。**

すべての国民（くにたみ）、部族、民族、国語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

たくさんの人々が白い衣を身にまとっていた。そして神を賛美していた。

黙示録 7:14 **そこで私が「私の主よ、あなたこそご存知です」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」**

白い衣の説明が、**子羊の血で真っ白な衣になった者。子羊の血**によって完全にきよめられた人たち。

普通は血痕が一番取れない。普通は血で洗ったら赤くなるでしょ、服は。

「血で洗って白くなる？ どんなんや？ 白い血液か？」って、そんな風にとっちゃダメです。

汚れ（けがれ）をきよめたという事です。

昔、ある宣教師から聞いた話です。

娘さんが小学校 6 年生の時、家のお風呂で 5 分・10 分・20 分・30 分、いつまで経っても出て来ない。

お母さんが心配して「どうした？」と聞いたら「洗っても洗っても、取れないものがある。」

「すぐに出て来なさい」と言って、お父さんの所に連れて行きました。

何があったかという、その教会の献金箱の中から盗んでいたんです。お金を。

ただの万引きではない。みんなが献げた献金の中から、買いたい物があったのか知らないけど、くすねていた。「なんて酷い事をしてしまったんだ！」

日曜学校で、「もし服が汚れたら洗剤で洗ったら消えます。心の汚れ・罪の汚れはどうやって消せるでしょう？ 石鹼水飲んでもダメです。」みんなアハハと笑っている時に、1 人泣いている。

「どうしたら、この罪の汚れをきよめる事が出来るだろう…。」

お父さんに今までの事を全部正直に言いました。彼は「**イエス・キリスト（子羊）の血でその衣を洗い、白くするのです**」と、ここから説明したそうです。

血はいのちを表します。血はいのち。

キリストが十字架にかかって流された**血**は、罪人の罪を消し去るための身代わりのいのち。

キリストを信じるとは、「イエス・キリストのいのちが私に浴びせられたので、私はもはや、神の前に罪なき者と認められたのだ」という事です。

教会では日曜日に聖餐式（せいさんしき）があって、ぶどう酒を回して飲むのですが、ある時家内の手が滑って、私の聖書にぶどう酒（*ぶどうジュース）をジャッとこぼしたんですよ。手が滑ってですよ。わざとじゃない…。そう信じています。ジャーっと。「あっ!」と言ったから「えっ?」と振り返ったら、聖書に、よだれのように赤いぶどう酒が…。周りのクリスチャンたちはみんな「ぷっ」笑ってるんですよ。神聖な時間だから目を閉じているはずなのに、みんな薄目で見て「ぶふふ。」

でも、1つ教えられました。白い本に赤い液がかかったら、どこに注目しますか？液がかかっていない白い縁の部分ですか？ やっぱり赤い部分を見るんじゃないですか？ 白と赤だったら、赤の方が目立ちます。ぶどう酒がかかっている赤ばかり見てました。「くっそー!」じゃないですよ。赤ばかり見て、「キリストの血潮を受け入れるという事は、神はキリストのいのちが私にかかったと見なしておられる。神が注目しているのは私の罪の部分ではなく、キリストのいのちの部分なのだ。」そう理解した時、本当に嬉しかったです。

黙示録 3:5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。

そのような国教会の中でも、本当に信じている人たちは救われているのです。

まとめましょう。私は尊敬しているカトリックの神学者がたくさんいます。今でも本を何冊も読み返し、特にブレナン・マニング（1934-2013）は、僕の中では必携の本で、これはもうやめられません。本当に多くの示唆を与えてくれます。でも、カトリック教会に行くつもりは全くありません。

はっきりさせたいのは「何が人を救うのか?」です。カトリックが人を救うのではないし、プロテスタントが救うのでもない。キリストが人を救うのです。もっと言えば、キリストの福音が人を救うんです。だから、カトリックでも、キリストの福音を受け入れている人は救われているし、受け入れてない人は救われてない。プロテスタントでも、キリストの福音を受け入れている人は救われているけど、キリストの福音を信じていない人は救われていないのです。

所属している教会が人を救うんじゃなくて、キリストの福音が人を救う。だから、一番大事なことは、キリストの福音を正確に知ることです。

そして、信じた後も正確に・厳格に・厳密に聖書の言葉を学んでいけば、どんな教会に行くべきかは自然に結論が出て来ると思うのです。聖書を正確に知って「すごいな、聖書は」と思ったら、「聖書を文字通り信じ、そこに立っている教会に集いたい」と思うようになるのが自然だと思います。〇〇教会・～～教会という外面より、本人が聖書を精密に知って行く事で、「自分が集うべき所はこれだ」と自ずと見えて来ると思います。

恐らく、気分を害する方がたくさんおられると思いますが、覚悟はしておりますので、どうぞ、お手柔らかによろしくお願ひしたいと思ひます。最後まで、ご清聴ありがとうございました。

* 動画は YouTube で「HCA 東住吉キリスト集会」

* ラジオ番組「聖書と福音」(約 14 分) も是非どうぞ。YouTube もあります。

* YouTube 「ごうちゃんねる」(約 10 分) もぜひ見てください。

動画筆記 : Rumi

